初出『漢字文献情報処理研究』第 8 号（2007.10）

古貨幣・古札・画像データベース

小島浩之

❑ はじめに

東京大学大学院経済学研究科では、平成 18 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、東京大学経済学図書館が中心となり「古貨幣・古札画像データベース」試行版（以下、古貨幣 DB と略）として公開した。

http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/shiryo/kahei.html

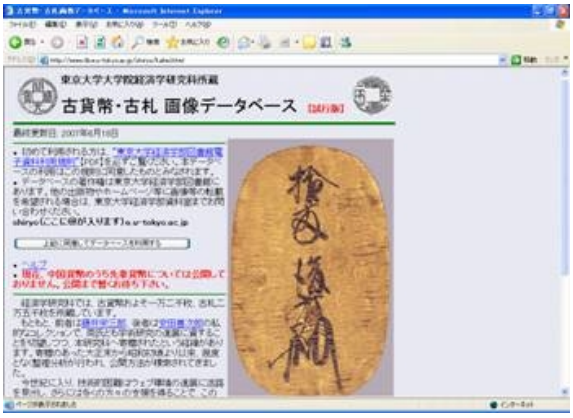

図１　トップページの画面

2007 年 9 月 1 日現在で、貨幣 11,317 点、紙幣 4,210 点に目録情報を付しカラー画像で公開している。貨・紙幣の表裏の画像はもちろんのこと、紙幣の透かしについても出来る限り画像で表現できるよう試みた。画像の例を図 2 に示す。図 2 の向かって左から、オモテ、ウラ、透かしの順に排列してある。下部の整理番号の末尾は、A がオモテ面、B はウラ面、S は透かしを示している。

筆者はこのデータベース作成に直接携わることができたため、この場を借りて作成者の立場から若干の紹介を試みたい。

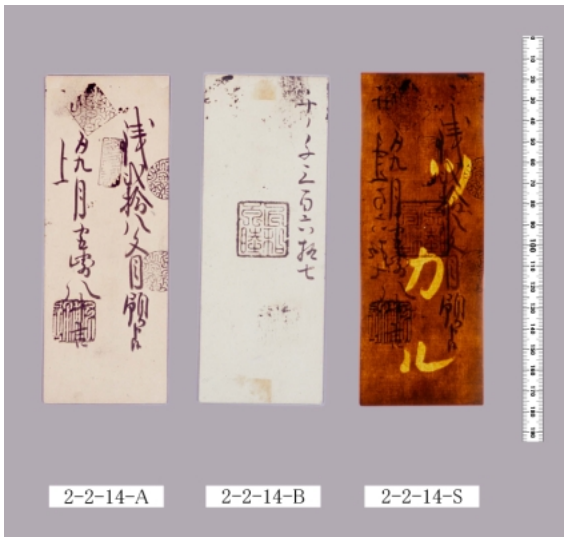

図２　弘前藩銭札

❑ 1. 所蔵コレクションの概要と現状

本研究科所蔵の古貨幣・古札は、来歴を異にする複数のコレクションから成り立っている。地域別の内訳を見ると貨幣では中国が約 6,400 点、日本が約 2,700 点、朝鮮半島が約 2,100 点、ベトナムが約 800 点で、中国貨幣の割合が非常に大きい。逆に紙幣は大半を日本の藩札、私札が占めている。このように本研究科所蔵の貨・紙幣は日本・中国などのアジア諸国を中心とした構成になっている。

■ 藤井コレクションと安田コレクション

次に貨・紙幣のうち最大のコレクションである藤井栄三郎旧蔵古貨幣（藤井コレクション）、安田善次郎旧蔵古札（安田コレクション）について紹介しよう。

藤井コレクションは、藤井栄三郎（深藪庵）【1865?－1949】旧蔵の貨幣で、総数は 12,000 点に及ぶ。藤井は化学工場経営の傍ら明治末年頃より古貨幣の蒐集を志し、大正 7 年には東洋貨幣協会専務理事、

同 9 年には副会長となった。当時、貨幣そのものの分析に関わるのは研究者ではなく古銭蒐集家だとの認識が強かった。藤井はこの傾向を嫌い研究重視の姿勢を鮮明にしたため学究肌として知られていたという。藤井コレクション中の中国先秦貨幣の布銭[1]は、現在でもあまり注意が払われていない裏面文字の相違まで考慮の上で蒐集されている。これなどは藤井の研究重視の姿勢が窺える好例であろう。

安田コレクションは二代目安田善次郎（松廼舎）【1879－1936】旧蔵の古札で、約 25,000 点にのぼる。安田は安田財閥の創始者たる初代安田善次郎の長男に当たる。このコレクションは元々前田惇の旧蔵品である。前田は大正から昭和初期にかけての蒐集家で、藩札狂と称される畸人であった。彼の蒐集した藩札コレクションは「地域に偏らない全国各地をひとわたり網羅した格好の収集」[2]だと高い評価を受けている。前田惇旧蔵品は本研究科の外、日本銀行貨幣博物館や黒川古文化研究所といった名だたる機関に多く収蔵されているという[3]。これらから安田コレクションが、質・量ともに第一級の藩札コレクションであることが解るだろう。

このように藤井・安田の両コレクションは、全く異なる来歴で本研究科にもたらされたが、企業家のコレクションであり、かつ高い学術的価値を有している点で共通しているのである。

❑ 2. 古貨幣 DB 公開までの歴史的経緯

藤井・安田コレクションの寄贈からほぼ半世紀たった昭和 51 年 9 月 4 日(土)付、毎日新聞朝刊は「大判、小判、ミイラなど…『宝のもちぐされ』東大」と題して、本研究科の古貨幣・古札をはじめ東京大学の所蔵する複数のコレクションが未公開である現状を批判した。同紙「近事片々」では「東大に大判、小判の山。カネではない資料だ、というが、握ったら放さぬは、同じ。」と痛烈に皮肉っている。しかし、本研究科では藤井、安田の両コレクションをどのように保存し公開するか常に模索し続けていたのであった。以下、本節ではデータベース公開に至るまでの東京大学における古貨幣・古札の保存、公開への対応について跡付けることにする。

■ 寄贈時の状況

藤井は寄贈の際に体系的な整理を行い[4]二種類の原拓本本を編んでいる。一つはコレクションの全ての拓本を網羅した『宝貨録』十八巻、もう一つは稀少な貨幣の拓本のみを選択して編集した『藤氏銭存』不分巻である。藤井はコレクションの寄贈に当たって、東京大学に①安全な保管、②散逸の防止の 2 点を強く求めたという[5]。ここから判断するに『宝貨録』の編纂は学術的見地からだけでなく、散逸防止、永久保存のために記録の必要を感じたためでもあったと考えられる。一方『藤氏銭存』は、同好の士に配布したものらしく、大学外でも広く自らのコレクションが活用されることを願ったものだと言える。このように藤井は拓本という複製手法を用いて、大学における資料の保存と公開の両面に配慮したことが解るのである。

一方、安田は書誌学に造詣が深く、善本、稀覯本を多く蒐集して松廼舎（まつのや）文庫（関東大震災で焼失）、安田文庫（戦災で焼失）の両文庫を開設したことで知られ、研究者への援助も惜しまなかった。東大への寄贈も「経済学攻究資料」という理由であり研究への援助なのだった。ただし寄贈時の安田コレクションは体系的な整理がなされてはいなかった。

■ 整理小史

藤井、安田両コレクションの寄贈後、本研究科では数度にわたって整理作業を行い、学術利用の促進と公開にむけて模索を続けてきた。既に述べた事項をも含めてこれを年表にまとめたのが次の表【補注:原文は版面配列の関係から「前ページの表」】である。

貨幣・紙幣整理年表

年月日	整理内容等	
	古貨幣	古札
大正11 年		東大に寄贈の内諾
大正12 年 9 月 1 日	関東大震災	
大正12 年 12 月 1 日		書類上の寄贈日
大正末～昭和初年	東大へ寄贈のための整理	
昭和 2 年陽春	『宝貨録』の完成	
昭和 2 年秋	『藤氏銭存』の完成	
昭和 2 年 9 月	収蔵設備新設工事の完了	
昭和 2 年 10 月10日	藤井コレクション東大へ搬入	

昭和4年2月		安田コレクション東大へ搬入
昭和12年9月～12月		天皇行幸に伴い天覧に供するための整理
昭和29年2月4日	経済学部古貨幣コレクションに関する座談会開催	
昭和29年～30年代	展示を考慮した小型ケースの作成と腐食貨幣の交換	
昭和43年	大学紛争を避けて某銀行へ寄託	
昭和51年9月4日	毎日新聞の報道	
昭和54年～55年	経済学振興財団の援助および大学本部経費（特定研究費）の支給による再整理	
昭和56年～57年	科学研究費補助金一般研究 B「日本・中国等の古貨幣に関する基礎的研究」の取得による再整理	
平成8年～10年	図録および冊子目録の作成、収蔵設備の更新	
平成18年	科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の取得によるデータベース化	
平成18年	腐食貨幣の保存処置	

この年表中で特筆すべきは、昭和29年に開催された座談会であろう。この座談会の目的はコレクションの保存および利用方法の改善をはかるため、来歴や重要性をはっきりさせることにあった。なかでも、田中啓文、郡司勇夫[6]といった寄贈当時の実情を知り得る人物が出席者に名を連ね、さらに内容が活字として残されている点[7]は非常に興味深い。ただ公開や利用ということになると、問題点の指摘はあっても結論は出ていない。座談会終了後に、古貨幣の保存ケースの更新が行われているが、これは座談会の成果を踏まえ、将来の公開を見据えた措置だったのだろう。

年表から解るように本研究科のコレクションは昭和 30 年代までに基礎整理を終えていた。しかし利用促進や公開に至らぬうちに大学紛争が起き、全てが振り出しに戻ってしまったのである。大学紛争時には、某銀行に寄託してコレクションを死守したが、紛争終了後に戻ってきたコレクションは保管状況が悪く無惨な姿になってしまっていたという。

このような状況の後に先の毎日新聞による報道がなされた。その後昭和 54 年から 57 年にかけて各種の経費を得て全点の再整理を実施している。この際には郡司勇夫を招聘し、4 万点に及ぶ古貨幣・古札について詳細な目録カードの作成と写真撮影が行われた。これによって研究者が閲覧するための基礎的な情報が整備されたのである。これらの情報の多くは平成 10 年までの間に図録および冊子目録として公刊されている。

初出『漢字文献情報処理研究』第 8 号（2007.10）

平成 10 年前後には収蔵設備も大規模な改修が行われた。しかし、展示設備が完備された訳でもなく公開が促進された訳ではなかった。このため近年は再び「知る人ぞ知るコレクション」となりつつあった。そこで学術的な利用を促すためデータベース化して画像公開することになったのである。実物そのものを一般公開する難しさは、現在でも変わらない。これに対してインターネットによるバーチャルな公開は、座談会開催時（昭和 30 年代）にはあり得なかった。つまりこのデータベースは、前世紀にはなし得なかったコレクションの利用・公開が、今世紀に入り新たな活路を見出した好例だと位置づけることができる。

また情報の保存や流布が時代とともに、拓本→印刷→デジタルデータの順に変化してきていることは興味深い。印刷の起源が拓本に求められ、拓本→版本→活字という流れで示される印刷史と比べるとそこに類似性を見出すことができるであろう。鋳造や印刷で文字情報が保持されている点からすれば、貨・紙幣は文献資料と同じ性質を有しているのである。博物資料だからといって文献資料とは縁遠いものだと考える必然性は無いのである。

図３　検索画面

■　古貨幣 DB の作成と公開

今回のデータベース化では、昭和 50 年代に作成したカード情報のデータ化と、藤井・安田コレクションのデジタル化を行い、対応するカードデータと画像データをリンクした。検索機能だけでなくブラウジング機能も備えており、研究者が比較検討作業を

する際の便宜を図っている。ただし次の２つの理由から全点公開には至っていないので試行版とした。

一つは予算上の制約であり、これは今後何らかの形で予算を獲得すべく努力せねばならない。もう一つは、元カードの情報が古く、現状では公開不適当と判断した部分があるからである。具体的には中国の先秦貨幣がこの範疇に入る。今後も最新の研究成果との照合作業を進め、試行版の表示が無くなるよう努力する所存である。

画像データは一旦カラーマイクロフィルムとして撮影した後、デジタル化することとした。中間媒体としてマイクロフィルムを作成することは、直接のデジタル化に比べ手間が掛かる[補注]。しかし敢えてこの方法を選んだのは次の理由による。一つは平面ではなく立体物である貨幣を高画質で撮影するためにはデジタルカメラでは限界があるということ。もう一つは、データの保存は出来る限り複数の異なる媒体で保有することが重要だと考えるからである。撮影は2006 年 7 月 3 日から開始し、9 月 26 日まで 3 ヶ月間を要した。1日当たりの撮影駒数は400～800駒、カメラマン以外に撮影補助者や貨・紙幣の出納･確認などで常時 3 人程度の人員が必要となった。これらは専任スタッフに加え、アルバイトにより人員を確保した。作業の流れは、基本的に書籍のマイクロ撮影やデジタル化と同じだが、若干異なる部分があるので参考までに以下に記録しておくことにする。

■　1駒当たりの撮影枚数について

撮影はフィルム 1 駒に複数枚の貨･紙幣を撮影し、デジタル化の際に分割処理することとした。例えば貨幣を 3 枚ずつ撮影するならば、1 駒目に最初の 3 枚のオモテを撮影、2 駒目はそのウラ、3 駒目は次の 3 枚のオモテという順序で撮影した。撮影は駒単価なので、資金節約のためには撮影駒数を圧縮する必要があったのである。

[補注] **原文は「手間も費用も掛かる」であったが、これは誤記のため訂正する。古貨幣 DB の場合、直接のデジタル化に比べて、マイクロ撮影＋デジタルスキャニングの方が費用負担は軽いと判断された。この詳細については拙稿「『古貨幣・古札画像データベース試行版』公開の意義と課題」（『月刊 IM』47(1), 2008.1）を参照のこと。**

■　貨幣の厚みと紙幣の透かし

貨幣の厚みと、紙幣の透かしは、撮影に少なからず影響を与えた。貨幣数枚を 1 駒で撮影する際、厚さの不揃いな前近代の貨幣はピント調整を難しくした。しかも厚みにより影が生じるため、光源の強さや位置にも相当注意を払った。また紙幣は全点について 1 点ずつ透かしの有無を調査する必要があった。調査方法は紙幣にライトを当てて透かしを目視で確認することとした。確認漏れを防ぐため、3 回の検査を行ったことで予想以上に時間を費やした。撮影についても、バックライトを当てた逆光状態で行うことになるため困難を極めた。残念ながらそれでも巧く表現できなかった透かしがあり、これらを美しくデジタル化するのは今後の課題である。

なお日本紙幣の透かし一覧で完全なものは無いようである。したがって今回の調査で得た知見を何かの機会に公表できればと考えている。

❑　おわりに

以上、作成者の立場からデータベース作成の意義と、作成の総括を述べてきた。世界的にも貨幣のデータベースは少なく[8]、恐らくこれだけの規模のものは初めて試みではないだろうか。試行版ということでまだ利用しにくい部分も多々あるが、今後内容を充実させてより良いものに育てていきたい。読者諸氏のご批正を乞うばかりである。

注

[1] 布銭とは秦の始皇帝の統一（紀元前 221 年）以前の戦国時代に、中国各地で使用された銭のうち、スキやクワなどの農機具を象った青銅銭の総称。その形態によって空首布、方足布、尖足布などに分類される。

[2] 郡司勇夫「前田コレクション私見」（『月刊ボザンナ』8-9, 1972）

[3] 郡司勇夫「古紙幣私考(4)」（『月刊収集』10-4, 1985 年）

[4] この整理は田中啓文、三上香哉が中心となって行っている（藤井栄三郎「一朱銀と一分銀の型」（『貨幣』78, 1925））。田中は古銭会の重鎮で銭幣館という貨幣・紙幣の私設博物館を設立している。そのコレクションは戦後、日本銀行に寄贈され現在の貨幣

博物館の基礎となった。三上香哉は雄山閣の考古学講座『貨幣』(1929-1930) を執筆した人物。この書物は貨幣を考古学の見地から初めて学術的に取り扱おうとした点で重要なものである。

[5] 山崎覚次郎「藤井栄三郎氏の寄贈された東洋銭貨のコレクションについて」(『経友』10, 1928 年)

[6] 田中啓文については前掲注 4 を参照のこと。郡司勇夫は昭和から平成にかけての貨幣研究家。田中啓文の門下であり、日本銀行貨幣博物館に永らく勤務し古銭界に大きな影響を与えた。

[7] 「経済学部所蔵古貨幣コレクションに関する座談会記録」(『経済学論集』23-2, 1955 年)

[8] 海外では下記の 2 つのデータベースが知られている。

- **The American Numismatic Society**
  http://www.numismatics.org/search/
- **The Fitzwilliam Museum**
  http://www.fitzmuseum.cam.ac.uk/opac/search/searchcm.html